HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子ども発達支援研究部門
Citation	子ども発達臨床研究, 13, 85-89
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73658
Type	other
File Information	100-1882-1707-13.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

子ども発達支援研究部門

子ども発達支援研究部門では、発達（発展、開発；development）とその支援に関するメタ的な理論構築を探究する「発達支援学」の構想を具体化するべく、総合研究を推進している。通称“発達科研”（代表・川田）と“教育思想科研”（代表・宮﨑）を軸としながら、理論的・実証的・実践的研究を推進している。また、さっぽろ子ども・若者白書をつくる会と協働した子ども・若者調査も展開し、調査活動を基盤とした社会連携にも取り組んでいる。以下に、主だった活動について報告する。

1．“発達科研”の推進について（川田）

引き続き、科研費基盤研究（B）『異年齢期カップリングの発達学：子どもの生きづらさを超えるための学際的協働』（代表者・川田学、2015～2018年度、通称“発達科研”）を推進した。今年度（平成30年度）の配分額は2,860千円（直接経費2,200千円）であった。以下に、主なものについて報告する。

⑴発達支援フォーラム2018 springの開催

昨年度末となる2018年3月17日（土）に、保育所・幼稚園・小学校における異年齢保育・教育に関するフォーラムを開催し、保育・教育現場から実践者が足を運び、実践交流と理論的考察を行った。参加者は約50名であった。概要は以下の通りである。

日時　2018年3月17日（土）14：00～18：00
会場　北海道大学教育学部3階会議室
【登壇者】
司会　伊藤　崇（北海道大学大学院教育学研究院・准教授）
話題提供者①発寒ひかり保育園（札幌市）
　　吉田　行男　氏（園長）









家村　維人　氏（副主任保育士）
話題提供者②美晴幼稚園（札幌市）
東　重満　氏（園長、子ども発達臨床研究センター学外研究員）
中川　絵理　氏（教頭）
話題提供者③香川大学教育学部附属高松小学校（高松市）
橘　慎二郎　氏（教諭）
前場　裕平　氏（教諭）
ショートレクチャー＆コメント
篠原岳司　氏（北海道大学大学院教育学研究院・准教授）
総括コメント
川田　学（北海道大学大学院教育学研究院・准教授）

⑵『未完のムクドリ：多世代多様な場で起きていること』関連企画パート 2

2017 年 3 月に発行された『未完のムクドリ：多世代多様な場で起きていること』について、昨年度に開催した「『未完のムクドリ』を読む：発達心理学と社会教育学の対話から」の継続企画として、「多様性」と「異質性」をキーワードにして議論した。7 名ほどが参加した。概要は以下の通り。

企画名『未完のムクドリ』を読む：発達心理学と社会教育学の対話からパート 2
日時　2018 年 6 月 29 日(金)10：00〜12：00
会場　教育学部 2 階小会議室

⑶発達科研・中間総括研究会その 2

発達科研の研究状況や論点について意見交換を行うため、2 日間にわたって研究会を開催した。科研メンバーに加えて院生等 15 名ほどが参加した。

企画名：Development 概念の転換・再考
日時　2018 年 8 月 20 日(月)、21 日(火)
会場　教育学部 3 階会議室

◆1 日目（8 月 20 日）：理論編
テーマ①「グローバル都市マニラの開発とスポーツ」
話題提供者：石岡　丈昇　氏（教育学研究院・准教授、スポーツ社会学）
指定討論者：辻　智子　氏（教育学研究院・准教授、青年期教育論）
テーマ②「異年齢期カップリングの発達学：〈イヤイヤ期〉を生み出す関係的力学の考察」
話題提供者：川田　学　氏（教育学研究院・准教授、乳幼児発達論）
指定討論者：白水　浩信　氏（教育学研究院・准教授、教育思想）
テーマ③「協働に基づくケア・コミュニティの意義：排除型自己形成を超えるために」
話題提供者：宮﨑　隆志　氏（教育学研究院・教授、社会教育）
指定討論者：加藤　弘通　氏（教育学研究院・准教授、発達心理学）

◆2 日目（8 月 21 日）：実践論編
話題提供者
学校教育領域：伊藤　崇　氏（教育学研究院・准教授、言語発達論）
発達障害支援領域：日高　茂暢　氏（作新学院大学・准教授）
室橋　春光　氏（札幌学院大学・教授）
居場所領域：榊　ひとみ　氏（函館短期大学・准教授）
指定討論者
宮﨑　隆志　氏（教育学研究院・教授、社会教育）
田岡　昌大　氏（大阪青山大学・講師）

⑷発達支援フォーラム 2018 autumn の開催

子ども発達臨床研究センター・子ども発達支援研究部門を中心とする研究成果、研究関心に基づき、実践者・当事者・一般市民への社会還元（気づき、学び、省察等）と、新たな研究シーズの掘り起こしを目的とした集いの第 3 弾となる企画である。今回は、2 歳児を窓として、私たちの社会

の子育て・保育が置かれている状況を認識し、少し広い視野から子育て・子育ちを考えることを目的に、フォーラムを開催した。前半は、研究者による基調報告と、実践者による「それぞれの現場での２歳児の姿」についての報告を行い、後半では、研究者と実践者によるトークセッションを行った。後半のトークセッションでは、フロアの声も拾いながら、２歳児のポジティブな面についての共有や、保育・子育て上の課題、心に余裕を持ちながら安心して子育てできるアイディアについて議論された。今回も、NPO 法人子育て応援かざぐるまの協力により、会場には遊びスペースも用意された。参加者は、子どもも含め 80 名超に上り、中には散歩の途中で参加した家族や、２歳児を育てる父親の参加もあり、盛況であった。

【総合司会からの感想】

子どもたちの笑い声、秋の柔らかい光と色とりどりの木々に包まれながら、２歳児は「自分の世界を楽しめる人､楽しみをつなぎ合わせる人たち」であるということを味わい､「奪う、制止する」のではなく、その楽しみを大切にしながらどのように関わっていけるかを会場全体で考えることのできた時間であった。その時間のあちこちに「あなた一人じゃない、みんなで育てていこう」という親へのメッセージが散りばめられているようにも感じた。

フォーラムの概要を以下に記す。

企画名　２歳児、どうなってるの？：ニッポンの子育て・子育ちを考える

日時　2018 年 9 月 23 日(日)13：30～16：30

会場　北海道大学　遠友学舎

総合司会　竹森　未知（教育学院博士後期課程）
　　小西　優佳（教育学院博士後期課程）

◆プログラム

第１部　基調報告「２歳児、どうなってるの？」

報告者：川田　学　氏（教育学研究院・准教授、乳幼児発達論）

第２部　トークセッション後半：「２歳児って、こんな人たち！」

パネラー：山田　智子　氏（NPO 法人子育て















応援かざぐるま・代表理事）
坂本　千春　氏（NPO 法人子育て応援かざぐるま）
丸谷　雄輔　氏（札幌ゆたか幼稚園・園長、センター学外研究員）
平野　麻奈美　氏（札幌ゆたか幼稚園・教諭）
工藤　祐輔　氏（幌北ゆりかご保育園・保育士）

ファシリテーター：川田　学
司会　小西優佳、竹森未知

⑸地域における居場所の協働プロジェクト（発達科研ほか／宮﨑）

2018 年度に実施した子どもと保護者の居場所感についてのアンケート調査結果の分析を進め、居場所づくりネットワーク（つきさっぷプロジェクト）内部で計 5 回の検討会を開催した。家族の孤立が子どもの自己肯定感に与える影響が明らかになった。報告書を作成し、次年度には地域での報告会を開催し、子どもと家族の居場所についての地域的な振り返りを行うことにしている。

⑹家族の変容についての短期プロジェクト（宮崎）

上記課題に重ねて検討し、孤立傾向にある家族の支援課題をアンケート調査結果から検討した。

⑺小学校での異学年協同教育に関する総合的調査（伊藤）

昨年度より引き続き、異学年協同活動をカリキュラムの核の 1 つに据えた国立小学校 1 校において観察調査を実施した。昨年度との違いは 2 点ある。第一に、調査の開始時期を 5 月として、2 つの活動グループを抽出した上で、活動内容をグループ内で相談する様子から観察を開始した。第二に、身体の振動情報をもとに対人コミュニケーション行動をセンシングするツールを児童および教師に装着させて、活動中の対人行動を測定したことである。

2．さっぽろ子ども・若者白書をつくる会との共同調査（加藤）

昨年度に引き続き、11〜12 月に札幌市内の小学校・中学校 30 校の児童生徒 10,000 人弱を対象とした生活実態に関する調査を行った。今年度は、子どもたちの「忙しさ」に注目した項目を新たに加え、分析した。

3．Moral Education の国際比較研究会（加藤）

2018 年 8 月 2 日に Sam Bamkin 氏（デモンフォート大学・東京学芸大学）と藤井基貴氏（静岡大学）、本学研究者を交え、Moral Education について、異文化的な視点から議論した。またその際に立ち上がった共同プロジェクトとして、2019 年 1 月 29 日に Bamkin 氏と本学の研究者 3 名で札幌市内の小学校の道徳の授業を見学し、教師へのインタビューを実施した。

4．子どもの学びを砕く教育実践と AS 卒業生のキャリアパスの実態 ── 韓国のオルタナティブスクール（AS、代案学校）の事例 ── （宋）

「多様な学びを保障する包摂的な教育基盤における原理・条件に関する比較研究」の一環として、2018 年度では特に子どもの学びを砕く授業実践に注目して AS 現場を調査した。5 月末は、韓国のオルタナティブスクール（AS）を訪問し、授業を参観した。また、社会的困難を生きる若者の実態分析とキャリアパス構築に必要な支援のあり方、またそれを可能とする条件を浮き彫りにするために、学校制度の周縁や外側に位置している韓国の AS の卒業生 3 名を対象に彼・彼女らのキャリアパス実態をインタビュー調査を行った。2019 年度からは AS の国際比較調査（韓国・日本・アメリカ・フィリピン）と AS 卒業生のキャリアパスに着目してその実態調査を行う予定である。